本書の大きな特徴は「現在入手困難な雑誌に掲載されている論文」を復刻掲載し、未公刊史料を活字化していることである。入手困難な雑誌としては明治時代の雑誌があるが、明治三十六年発行の中外薬報に載った、かなまち（編）『徳川時代に於ける種痘に関する法令』があり、史料的価値の高く短い文献を全文載せている。長い文献としては松本　端が刀圭新報に連載した『大阪市種痘歴史』を「少し長文であるが重要なので全文を掲載する」と注記して、九十ページ近くに渡って転載している。この文献も史料的価値が高いものである。

未公刊史料の例としては、高橋痘庵『種痘対策ノ稿』（稿本）があり、全文を約十一ページにわたって掲載している。この史料は注によると、編者が秋田県角館の郷土史家から写本を譲り受けたもので、内容は「角館の高橋痘庵が、明治八年太平学校で種痘試験を受けた際の解答の草稿を整理したもの」である。

英文文献四編中二編の原文を転載している。一編は Earl R. Bull（鹿児島）の論文 "Vaccination in the Orient" である。編者は Bull について調査中とのこと。ご存知の方は編者松木氏に連絡して欲しい。もう一編は、北里研究所教授 Mikinosuke Miyajima（宮島幹之助）の論文 "The History of Vaccination in Japan" である。

医史学会編の『日本牛痘接種関連文献目録』は、医史学会会員が所蔵している文献などを報告してもらい、編集委員会でまとめたものであるが、『日本牛痘種痘史文献目録』は編者が一人で収集し、まとめたものである。あらためて敬服する。

（蔵方　宏昌）

〔岩波出版サービスセンター、東京都千代田区神田神保町二―三、電話〇三―三二六三―七〇七八、二〇〇二年八月二十日、二九四頁、非売品〕

中村　禎里　著

『近代生物学史論集』

中村禎里先生は日本医史学会の古くからの会員であるとともに、紹介者がハーヴィ研究を始めた若い日に最も大きな影響を受け、今も深く敬愛している科学史家である。その禎里先生が「古稀の自祝」として、これまでのご研究の一部を纏め上品な装丁の本として上梓し後進の者たちに贈ってくださった。線を引き書き込みをして何度も読み込んだ懐かしい論文の数々を今また読み直し、ここに紹介できることを幸せに思う。

本書には、一九六〇―七〇年代に発表された十七世紀近代生物学形成期に関する論文群と、比較的近年に発表された、ソビエト哲学と生物学、日本の分子遺伝学史、血清療法の先着権、栗本丹洲、設楽芝陽に関する研究の五編が納められている。このうち北里とベーリングの先着権をめぐる覚え書き

は、医学史の研究者に対しても示唆するところの多いものと思われる。しかし、ここでは十七世紀近代生物学形成期に関する論文群を中心に紹介しよう。これには原著論文から、着想を記した覚え書き的なものまで、完成度がまちまちな十二の論文が収められている。

広く知られるように、「生物学 Biologie」という言葉は十九世紀初頭に初めて登場する。しかし、著者は近代生物学の成立を近代科学の形成をめぐる広い問題の場に置き、十七世紀に注目する。そして、近代科学成立論の中心であった力学、天文学、つまり広義の物理学の思想的な形成要因とは異なる生物学独自のものを、ハーヴィの血液循環をめぐる研究活動の中に探ろうとしてきた。これは、近代科学には機械論あるいは数学的方法がつくりつけになっているという当時の「科学革命論」を彩っていた固定観念に対する学問的挑戦であり、同時に、ここには近代科学の形成に対する思想的要因と技術的要因の相互関係という、より広い思想的背景をもつもう一つの重要な争点への問題関心がある。「生物学の近代化は数学的方法の採用によって始まったわけではない。生理学・生物学における分析的思考法は解剖学に起源し、実験的方法は動物の生体解剖に由来する。ここから生物学の近代化は始まった」とする著者の結論は、同時に、近代化とは何か、あるいは、生物学とは、科学とは何かについての著者独自の思想的見解の宣言ととることもできよう。

もちろん、著者自身も書いているように、三十―四十年以上前に書かれたこうした論文群が、細部の訂正なしに、そのまま今日も通用するものであるかは疑問である。ハーヴィの心臓中心説と血液中心説の関係、動物実験の開始に関する論文等、英文で書かれていれば欧米でも注目されたであろうという時代の先端を歩んでいた研究ほど、時代の流れとともに厳しい批判にさらされる。一九八〇年代以降の新しい研究状況の中に育った若い研究者たちは、さらに基本的なスタンスに対しても、より厳しい批判の眼を向けることであろう。しかし、同時に著者が書くように、この一九六〇―七〇年代の日本の科学史研究の状況の一断面が鮮やかに描き出されている論文群を、そのまま訂正なしに集めて示すことも極めて意味あることと言えるであろう。一九六〇―七〇年代とは、その立場と距離の取り方は多様であるとはいえ、科学史家たちが共通の鮮明な問題意識と一定の「問題の場」を持ち、活発な議論と活動を展開した時代であった。

この時代に生命科学思想史を志した者にとって、中村禎里は目の前に屹立する高い峰であった。日本で生命科学思想史、しかも、十六―十七世紀に焦点をあてて研究を進める者は孤独な戦いを強いられた。まず、研究者層の薄さ。欧米で出された概説書、あるいは、論文を切り貼りした紹介的な文や書物の書き手や論じ手は多数いても、原典にあたり、オリジナルな着想と緻密な検証に裏付けられた研究論文を発表し、さらに相互に批判しあうという意味での研究者層は極めて希薄である。こうした状況の元では、たとえ優れた論文が

出たとしても、その真価を認められることなく看過され埋もれていく。さらに、インターネットで容易にダウンロードができる今日と異なり、当時、十六―十七世紀の原著を直接、手にできる機会はきわめて限られていた。たとえ手に出来ても、次には言語の壁が立ちはだかる。中村禎里先生は、こうした時代において、オリジナルな着想と緻密な検証に基づく確かな研究論文をコンスタントに発表し続けていた数少ない真の研究者の一人であった。そして、先生は、まだ無名の若者たちの研究にも真剣に向き合い、本質を突いた鋭い批評を加えてくださった。

先生は、「あとがき」で紙幅を割き、紹介者の拙論を紹介してくださっている。拙論はハーヴィの研究活動を、先生とは異なった観点と方法によって分析しようというものだが、研究開始以来三十年の間、先生は度々重い一次文献を鞄に詰めて運んできて貸してくださり、「禎里なんか踏みつぶして先に進んで行きな」と常に暖かい激励の言葉を贈ってくださった。来年、創立五十年を迎える生物学史研究会は、生命科学思想に関連する多様な分野でいま最も活発な研究活動を繰り広げている四〇代、五〇代の会員たちを中心に活況を呈している。その多くは、こうした禎里先生の寛容な姿勢と励ましに力を得て研究活動を続けてきた者たちである。十六―十七世紀科学思想史研究も、広範囲の原典を読み解き、欧米の学会誌に積極的に発表する二〇代―三〇代の新しい世代によって文字通り新しい研究者層が形成されようとしている。

二年前に大学をリタイアされた先生は、今、日本の動物観・生命観研究から、インド仏教における生命思想へと、その研究活動を展開している。次に又こうしたテーマのご著書を紹介する機会が得られることを心から願っている。

（月澤美代子）

〔みすず書房、東京都文京区本郷五―三二―二一、電話〇三―三八一四―〇一三一、二〇〇四年二月五日、四六判、三八四頁、定価四四一〇円〕

青木　純一　著

『結核の社会史』

青木純一『結核の社会史』は、一九〇〇年近辺から第二次大戦までの期間、すなわち全国の結核死亡率が対一〇万でおよそ一八〇と二五〇の間を大きくうねりながら、国家による結核対策が離陸し、戦後の急速な克服につながっていく期間の結核の歴史を検討している。これまで、結核の歴史は、医学史研究の中核となる問題を数多く提起してきた。マキーオンが平均寿命の伸長の原因についてのテーゼを編み出したのは、十九世紀イギリスの結核の死亡率の減少の原因を推測する作業を通じてであった。ソンタグが病気の隠喩の研究という豊かな領域を切り開いたのは、「自己の病」である結核と「他者の病」である癌とを対比させた考察を通じてであった。